



今江祥智 の本

第12卷

童話集

理論社

今江祥智 の本

第12卷

童話集

理論社

今江祥智の本第12巻

一九八〇年三月初版

一九八八年五月第六刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

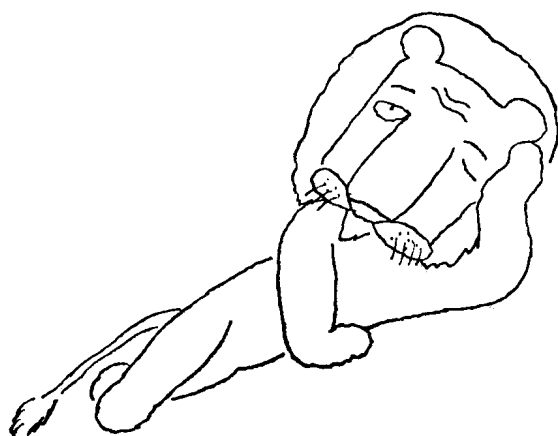
電話 営業〇三(二〇三) 五七九一

出版〇三(二〇三) 五七九四

編集〇三(二〇三) 二五七七

振替 東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



童話集一

ねこふんじやった	7
セーターのあな	21
アメだまをたべたライオン	26
三びきのライオンの子	30
女の子とライオン	37
サンタクロースが二月にやってきた	48
白いサーカス	55
ちょうちょむすび	63
おとなしすぎる	72
おいしい花	77
馬車にのった山ネコ	82

トラよ、走れ 85

左きき 94

フクロウと子ねこちゃん 102

どしゃぶりねこ 106

冬の部屋 113

笑い猫飼い 120

とぶねこ 137

ゆめみるモンタン 141

フルートと子ねこちゃん 149

あとがき 215

解説 長新太 217

編集委員 上野 瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本文 加藤文明社

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第12巻

童話集
一

ねこふんじやった

とんとんむかし、まだみんながあたまにちょんまげをゆっていたころのこと。なかでも、お城づとめのみなさんのちょんまげはりっぱで、ねこだって、お城にいるのなら、ちょんまげをのっけなければならぬくらい……。

けれど、その城にはねこは一びきもいなかった。だから、その城のちっちゃなおひめさまは、ねこを見たことがなかった。

とにかく生まれてからずっと、城からでたことがなかったのだからしかたがない。なにしろ、ひとりっ子だから、とのさまがそれはだいいじにしていたのだ。

といっても、おひめさまがそんなくらしにたいくつしていたことはない。

ちっちゃなおひめさまにくらべれば、お城はどーんと大きく、たっぷりひろくて、中庭でれんげつみをして花輪をつくっていても、もひとつの中庭で、池のこいにえさをやっても、ゆきがふ

った日なら、ゆきうさぎをつくっていても——一日はすぐに過ぎてしまった。

だからある日のこと、とのさまがもったいぶって、

「ひめ、きょうは外出じゃ、はじめて城からでるのじゃぞ。めずらしいものを、たんと見られるわ。といっても、ふうん……と、はなをならしただけだった。

そして、かごにのせられ（おひめさまは、おしこめられたとおもった）、ながいながい行列がくまれて、いざ、「おたちィ……」——となってもおひめさまはべつにうれしくなんかなかった。それにゆくさきがお寺でおはかまいりときては、こころがはずむわけもなかった。

おひめさまは、かごの中ではじめてたいくつしていた。

のぞきまどをちょいちょいあけては外を見るのだが、かごをかこむようにして歩いているさむらいたちの、いかめしいかおがあるばかり、そのむこうには、行列にむかって、はいつくばっておじぎしている人のあたまが見えるばかり……。

おひめさまは、まったくおもしろくなかった。

（なになが、「めずらしいものを、たんと見られるわ」やのン……）

こころの中で、おくにことばでぼやいていた。

行列が、ひどくのろくおもわれた。いっそ、とびおりて、よこをかけぬけてやったら、さぞかし、すっとしますやろなあ……とおもったが、そんなことをしたら、まわりのさむらいが、

—ひめぎみ、おくるいめされたか！

なんてわめいて、ぐいととりおさえますやろなあ……とおもうと、やっぱりからだがすくんでしまふのだった。

むりもない。おひめさまは、まだ八つになったばかりなのだ……。

それでもようやく行列は、お寺についた。

おひめさまは、やっとかごからでることができた。

お日さまが、とてもまぶしかった。お寺の空はぐんとひろかった。

（お城みたいに、いかめしいたてものがないさかいやからだすやろなあ……）

とおもい、おひめさまは大きくいきをすいこんだ。お香のいいにおいが、はなにつんときた。とてもしずかだった。おひめさまは、お香のにおいが氣にいつて、そいつをふかぶかとすってみたくて、もいちど大きくいきをすいこもうとした。

そのとき、なにやら、ふんにゃかしたものが、あしのくるぶしに、つんとあたった。くすぐったくて、もうすこしで、こえをあげるところだったが、さすがはおひめさま、女の子といつても、やはりたしなみがちがう。ぐっとこらえて、そつと見ると、

—なんだすやろなあ。

おもわず、こごえでいってしまった。

上等の、まっ白なふとんわたをちぎったみたいなものに、タンポポの花のような目が二つついて、そいつがまぶしそうにおひめさまを見あげると、

—ニィ……。—

とないてすりよってくるのだ。

くすぐったくて、さすがのおひめさまもこんどは、ふひひふひふひ……と、おかしなこえをあげてしまった。

そのこえを耳ざとくききつけたおくがたが、これからおはかまいりというのに、はしたない——といったきつい目で、おひめさまをふりかえった。その目がこわくって、おひめさまは、あとじさりした。

そのとたん、ふとんわたがほえた。

—ニギヤオン！—

おひめさまも、ひめいをあげ、さむらいがかけよってきた。

—ひめ、いかがめされた。

いかがめされた——と、しかつめらしくきかれても、ふんずけたあいてがなんだかわからないのだからせつめいのしょうがない。

そこで、（母上さまの目がおとろしゅうて——だけはぬかして）ついあとじさりして、このものをふんだらしいのじゃ……といつて下をゆびさしたが、かんじんのこのものはもういなかった。

—ひめ、てんごがすぎますぞ。

うそをついたようにとられて、家老にしかられてしまった。

おひめさまは、ぶんとふくれた。つんとすねた。しかし、いまはそんな子どもにかまっているひまはないと、かけつけたさむらいたちはみんなちってしまった。

（あんにやろめ！）

町の子なら、そういっておおるところだが、おひめさまは、そんなことばをしらない。ふくれつつらでさっきのをさがした。

いた、いた。すぐよこの庭石のかげで、まあるくなってる。にくいあんにやろめだったが、そうして見ていると、かわいかった。つかまえてだきしめたくなった。さっきのくるぶしにあたったときにくすんとした毛のかんじをおもいだすと、おひめさまは、あんにやろめに、ほおずりしたくなつた。それで、

—いちどう、たちませえい！

と号令が、かかっているのに、ひょいとよこへで、あんにやろめをひろいあげようとした。あんにやろめは、ひょいととんでにげた。

おいかける。にげる。またおいかける。

—ひめ、ひめ！　こちらへ、こちらへ。

家老が、おしころしたこえをとばしながら、おひめさまをおいかけてきた。

—さようなところで、なにをなさっておられまする。

なにを——ときかれても、おいかけるあいての名もしらないのだから、せつめいのしようがない。おひめさまは、だまってしぶしぶものところにもどって、歩くしかなかった。あんい、やろめのおかげで、いちばんうしろになったが、このほうが気がらくだった。

おひめさまは、きよろきよろしながら歩いていたが、さっきのおいかけっこで、きもののひもが一本ゆるんで、しっぽみたいにたれていることに気づかなかった。

おひめさまは、あんい、やろめのこととはわすれようと呼吸をととのえ、しずしずと歩きはじめた。おまいりがすんでからおいかけてもおそくない。

ごせんぞさまのはかが目にはいるところまでくると、いちどう止まられませい、ときた。おひめさまもたちどまった。

そのとたん、おなかのあたりを、だれかが、つんつんとひっぱるのだ。おどろいてふりむくと、あんい、やろめが、さっきのひもにじゃれつき、くいついてひっぱってるからだった。

おひめさまは、そっとそおっと、ひもをたぐりよせる。

あんにゃろめはしっぽをきゅんとたて、耳をふせて、おしりをふり、つつつとせまってくる。とびついた。そこをすかさず、おひめさまは、すばやくつかまえた。

また、家老に見つかってはうるさいので、そっとたもとに隠れた。あしもとがふわふわして気もちわるいのか、あんにゃろめはなきごえをあげたが、たもとからみれるほどではなかった。

おひめさまは安心し、こころおだやかにおまいりをすませることができた。

おまいりのあいだ、ときどき、たもとのそでをそっとあけてのぞいてやると、あんにゃろめはまるくなってねむっていた。

(こんなのをしめしめというのンね……)

おひめさまは、かわいいしたをちろりとだして、ひとりでにこにこした。それから、いまがおはかまいりのさいちゅうで、ここがお寺であることをおもいだして、あわててかおをひきしめた。

お寺でおひるをいただくことになって、おひめさまは、いちばんおくのざしきにあがることになった。ほんとは、さっさとかえて、あの白い生きものとあそびたかったのだが、そんなわがままいえるわけがなかった。めだっけはいけなかったので、おひめさまは、たもとの中を気にしながら、できるだけおとなしくたべていた。

やさいばかりの精進料理でさかななしだったからだいじょうぶのはずなのが、そこがそれ、お寺

